

### 恋愛関係における追求：後悔尺度の作成と 分析：恋愛マキシマイザーと恋愛サティス ファイサー

越智, 啓太 / OCHI, Keita

---

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

78

(開始ページ / Start Page)

185

(終了ページ / End Page)

194

(発行年 / Year)

2019-03-18

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021792>

# 恋愛関係における追求—後悔尺度の作成と分析

恋愛マキシマイザーと恋愛サティスファイサー

越 智 啓 太

---

## 要 旨

---

本研究では、Schwartz et al. (2002) の開発した消費行動における追求—後悔尺度 (Maximization and Regret Scale) を恋愛関係に特化させた尺度を作成し、その妥当性と信頼性について検討した。その結果、この尺度の得点の高い恋愛マキシマイザーは恋愛に関する幸福感が低く、嫉妬認知をしやすく、多くの人と交際し、それぞれの交際期間は短いということが示された。また、恋愛における追求—後悔尺度の得点は、消費行動における追求—後悔尺度の得点と比較的高い相関をもっており、恋人選択過程と購買行動が類似したパターンを示すことがわかった。

キーワード：恋愛行動, マキシマイザー, 幸福感, 嫉妬, 消費行動

---

## 1. 問 題

Schwartz, Ward, Monterosso, Lyubomirsky, White, K., & Lehman, (2002) は、消費行動を分析し、消費者の中には、「常に最良のものを追求する」ものと「他にもっと良い選択肢があろうとなかろうと、とりあえず満足できるものを求める」ものがあることを示して、前者をマキシマイザー (最大化指向者 maximizer), 後者をサティスファイサー (満足指向者 satisficer) と呼んだ。マキシマイザーはサティスファイサーに比べて、商品の比較にこだわり、買うと決めるまでに時間がかかり、他人の買ったものと自分の買ったものの比較に時間を費やし、買った後で後悔することが多く、買った後で買わなかった別の候補についてあれこれと考えることが多いことがわかった。また、彼らは、幸福度、楽観性、自尊心、生活満足度が低く、良い出来事をあまり楽しめず、くよくよ考えたり思い煩うことが多く、抑うつ傾向が

高いことも示された。

Schwartz らは、マキシマイザーとサティスファイサーは、一次元の尺度であると考えており、個人はマキシマイザーとサティスファイサーを両極とするどこかに位置づけられるという。そして、彼らはその程度を測定するために、「買い物の時本当に気に入った服を探すのに苦労する」、「何かを選ぶときは、その時点では存在しないものも含め、あらゆる可能性について考えてみる」などの項目からなる追求—後悔尺度 (Maximization and Regret Scale) を作成した。

ところで、恋愛行動における交際相手選択においても、マキシマイザー—サティスファイサーの軸を仮定することは可能である。つまり、恋人や配偶者を選ぶ場合に、「常に最良、最高のものをもとめて追求を続ける」者と、「とりあえず満足する相手と交際する」者である。Schwartz らの尺度においても、「わたしは恋愛関係を服のように見なしている、ぴったりの人を見つけるまでにいろいろ試してみたい」という恋愛に関する項目

は1項目含まれているが、あくまで、さまざまな消費行動すべてを扱うのが、この尺度の特徴であり、恋愛はその中の1項目に過ぎなかった。

Schwartzらは、マキシマイザー—サティスファイサーの傾向は「領域別」になっているということを確認している (Schwartz, 2016)。つまり、ある領域でマキシマイザーであっても他の領域においてはマキシマイザーであるとは限らない。とすると、恋愛行動においてこのマキシマイザー—サティスファイサーの軸について検討しようとする場合には、恋愛行動に特化した追求—後悔尺度を作成することが必要になってくる。そこで、本研究では、この尺度を構成し、その妥当性と信頼性について検討することにした。

## 2. 【研究1】恋愛関係における追求—後悔尺度の作成

**問題：**【研究1】では、恋愛関係に特化した追求—後悔尺度を作成し、その因子構造や基本的な特徴について分析する。

**調査参加者：**あらかじめ調査会社のデータベースに登録されている調査協力候補者の中から、全国の18歳～39歳までの現在交際相手のいる未婚の男女2,200名(男女1,100名ずつ)を調査対象として選択しウェブ調査を行った。調査対象者の平均年齢は、28.39歳 (s.d. 6.22)、男性29.25歳 (s.d. 6.10)、女性27.52歳 (s.d. 6.24)であった。参加者はこの調査に回答することでちに商品などと交換することが出来る一定のポイントを得ることが出来た。

**方法：**調査は(株)クロス・マーケティングに委託してウェブ上で行った。回答所要時間は、おおむね5～15分程度であった。本調査は、データバイオレンスに影響する諸要因を明らかにするための調査の一部として行われた。調査は、それぞれ異なった尺度から構成されている第1次調査(越智・喜入・甲斐・佐山・長沼2015b; 越智・甲斐・喜入・長沼, 2016b)、第2次調査(越智・喜入・甲斐, 2017)、第3次調査と3回に分けて

行われた。調査対象者の重複はない。これらの全ての調査において、追求者—満足者尺度は実施されているので、【研究1】では第一次から第三次調査までの、すべての実験協力者のデータを込みにして分析を行なった。

**結果と考察：**当初作成された11項目の尺度を最尤法で因子分析したところ、ひとつの因子が抽出された。ただ、1項目について、因子負荷量が相対的に低かったため、この項目を除外して10項目からなる尺度について、再度、最尤法によって因子分析を行った。その結果、ひとつの因子のみが抽出され、この因子のみで分散の55.19%を説明した。Cronbackの $\alpha$ 係数は、0.922となった。この10項目を恋愛関係における追求—後悔尺度とした。因子行列をTable 1に示す。

恋愛問題における追求—後悔尺度の平均値は33.86 (s.d. 12.20)となった。男性のみの平均値は34.73 (s.d. 11.94)、女性のみの平均値は32.99 (s.d. 12.39)で、男女の得点の差は $t(2198) = 3.36$ ,  $p < .01$ となり、男性のほうが有意に高かった。ただし、今回の調査では、男性調査対象者のほうが女性調査対象者よりも年齢が有意に高かった ( $t(2198) = 6.56$ ,  $p < .01$ ) ため、年齢の効果を取り除いて再度分析を行ったが、やはり性別の効果に有意差が認められた ( $F(1,2197) = 8.17$ )。また、年齢と追求—後悔尺度の得点の間には、 $r = .082$ と非常にわずかであるが有意な正の相関があった。本研究では、性別によって対象者の年齢が若干異なっていたため、性別の効果を経験的に取り除いて偏相関を計算したところ、 $r = .073$ となったが、相関の有意性は消失しなかった。つまり、年齢と追求—後悔尺度の得点は無相関であるとはいえず、わずかではあるが、年齢が高くなるほど高くなる傾向があった。

**考察：**本尺度の項目は追求についての項目と、後悔についての項目が含まれていた。消費行動における追求—後悔尺度の研究においては、これらは独立の因子を構成するという報告もあるが(磯部・久富・松井・宇井・高橋・大庭・竹村, 2008)、今回作成した尺度では後悔と追求は一つ

Table 1 恋愛における追求・後悔尺度の因子分析結果

	因子負荷量
1. 恋人ができた後に、もっと良い人がいた可能性を考えて後悔することがある	0.855
2. 恋人が良い人であったとしても、「もっと良い人がいただろうに」と思ってしまうことが多い	0.837
3. 恋人ができた後に、他の人にしてあげればよかったと思うことがある	0.850
4. 付き合うために努力した相手でも、いざ付き合ってみると後悔することが多い	0.767
5. 恋愛において優柔不断だと思う	0.524
6. 誰と交際するかという決断をする時は、他の人ではどうかと考えてみる	0.727
7. つねに理想の恋人を追い求めている	0.596
8. たとえ交際している相手がいてももっと良い人がいないかと探している	0.823
9. 交際相手がいても合コンなどに出てみたいと思う	0.657
10. 誰かと交際する前には、他の異性と比べてみる人が多い	0.714

の因子としてまとめることができた。これは Schwartz らの当初の考えと一致している。この尺度の得点が高いものは恋愛マキシマイザー、低いものは恋愛サティスファイザーといえるであろう。

### 3. 【研究2】恋愛における追求—後悔尺度と恋愛幸福感の関連

**問題：**Schwartz らは消費行動において、追求—後悔尺度の得点が高いマキシマイザーは、主観的な幸福度が低かったり、うつ傾向が大きいことを示している。そこで【研究2】では、このような傾向が恋愛においても見られるか、つまり恋愛マキシマイザーは恋愛における主観的な幸福度が低いかを調査する。

**調査参加者：**【研究1】と同じデータセットを分析した。

**方法：**第1～第3調査において、調査参加者に自分から見た現在の恋愛関係の幸福度、交際相手から見たふたりの関係の幸福度の推定値を「非常に幸せである(7)」から「非常に不幸である(1)」の7段階で評定させた。このうち、第1調査の600人(男女300人ずつ)については、これ以外に世間一般のカップルの平均的な幸福度と友人のカップルの幸福度についてやはり7段階で評定させた。また、第1～第3調査において交際相手に対する愛情と友情を評価させる愛情尺度、友情尺度を

実施した。愛情尺度は、「○○さんのためならどんなことでもしてあげるつもりだ」、「○○さんと一緒にいると相手の顔を見つめていることが多い」などの項目からなり、友情尺度は「○○さんと一緒に話をするのは楽しい」、「○○さんと遊びに行くのは楽しい」などの項目からなる。これらの尺度はルービンの愛情—好意 (Love-Like) 尺度を越智 (2015) が改良したものである。これらの各評定値、尺度得点と恋愛における追求—後悔尺度の相関係数を算出した。

**結果：**幸福度評定値の平均 5.10 (s.d. 1.31)、交際相手の幸福度推定値の平均は 5.01 (s.d. 1.20)、世間一般カップルの幸福度推定値の平均は 4.70 (s.d. 1.24)、友人カップルの幸福度推定値の平均は 4.80 (s.d. 1.26) となった。世間一般のカップルより自分たちカップルが幸せであるという認知のバイアスが生じることはいままでも示されているが (Martz, Verette, Arriage, Slovik, Cox, & Rusbult, 1998)、本研究結果もその結果が追証されたわけである。また、愛情尺度の平均は 38.71 (s.d. 10.55)、友情尺度の平均は 26.46 (s.d. 6.54) であった。これらのうち、交際相手の幸福度推定値、愛情尺度、友情尺度については、性差が見られ、交際相手の幸福度推定値については女性の得点が高いこと (男性のほうがより幸福を感じると推定する) ( $t(2198) = -4.23$ )、愛情尺度については男性の得点が高いこと ( $t(2198) = 3.39$ )、友情尺度については女性の得点が高いこと

Table 2 恋愛における追求—後悔尺度の得点と恋愛幸福度評定値の相関

恋愛幸福度	-.267**
交際相手の恋愛幸福度推定値	-.143**
世間一般のカップルの幸福度推定値	.057 <i>n.s.</i>
友人カップルの幸福度推定値	.057 <i>n.s.</i>
愛情尺度	-.089**
友情尺度	-.226**

(\*\* $p < .01$ )

( $t(2198) = -8.09$ ) が示された。

恋愛における追求—後悔尺度とそれぞれの評定値との関係を Table 2 に示す。仮説通り、恋愛幸福度、交際相手の恋愛幸福度推定値、愛情尺度、友情尺度のすべてで有意な負の相関が見られ、恋愛マキシマイザーは恋愛において主観的な幸福感や主観的な交際相手への愛情、友情が低く認知されていることが示された。世間一般のカップルの幸福度や友人カップルの幸福度認知には影響を与えていなかった。

念のため、恋愛における追求—後悔尺度の得点が平均点以上か以下かによって参加者を2群に分けて幸福度(高群 4.79, 低群 5.51)、交際相手の幸福度推定値(高群 4.82, 低群 5.26)、世間一般のカップルの幸福度推定値(高群 4.69, 低群 4.70)、友人カップルの幸福度推定値(高群 4.77, 低群 4.86)に差があるかどうかについて検定したところ、前二者については  $p < .01$  の有意な差が認められた。

**考察:** Schwartz らの研究において消費行動において実証された追求—後悔型の意思決定スタイルは恋愛行動によっても同様に幸福度の低下をもたらすことが恋愛幸福度、交際相手の恋愛幸福度推定値、愛情尺度、友情尺度の4つの尺度によって実証された。この結果は恋愛における追求—後悔尺度の妥当性を示したものとといえるだろう。

ただし、恋愛における追求—後悔傾向と幸福度の関係については一点、留意しなければならない点がある。それは、幸福度評定値を横軸にとり、縦軸に追求—後悔尺度の得点をとって、その平均値をプロットすると全体としては確かに右下がり

の直線になるものの、幸福度が7段階評定で「1」のものについては追求—後悔傾向得点が低くなったという点である。これは恋愛における追求—後悔尺度と幸福度が逆U字型の関係を持っている可能性を示しているのかもしれない。この点については今後、引き続き検討してみることが必要であろう。

#### 4. 【研究3】恋愛関係における追求—後悔尺度と嫉妬尺度との関連

**問題と方法:** 追求—後悔尺度の得点と嫉妬傾向については、理論的にはあまりはっきりしたことはいえない。恋愛マキシマイザーはつねに新しい恋愛対象を探し、現在の恋愛対象は後悔の対象となるのであれば、現在の交際相手に対する嫉妬は少なくなることが予測される。しかし、一方で最大の幸福を追求する故に現在の交際相手からの愛情を求め、その裏切り可能性についてつねに監視を怠らない可能性がある。この場合、嫉妬傾向は大きくなることが予測される。一方、恋愛サティスファイサーは現在の恋愛に満足していることが多く、嫉妬しにくいと考えられるが、これは恋愛関係における追求—後悔尺度と嫉妬傾向が正の相関を示すことを示唆する。この問題について検討するために【研究3】を行った。嫉妬を測定する尺度としてもっともポピュラーなものの一つが、Pfeiffer & Wong (1989) による多面的嫉妬尺度 (Multidimensional Jealousy Scale) である。この尺度は嫉妬を認知、感情、行動の3つの側面から測定するものであるが、このうち、認知、感情の

側面については、我々が日本語版を作成している(越智・喜入・甲斐, 2017)。嫉妬認知とは、交際相手が別の異性に好意を寄せているのではないかという認知について測定するものであり「私は〇〇が他の異性に気があるんじゃないかと疑うことがある」、「〇〇は私の知らないところで他の異性と親密になっているかもしれないと思っている」など8項目によって構成されている。また、嫉妬感情とは、交際相手の行動に対していらいらする度合いを測定するもので「〇〇が他の異性としゃべっているのを知ったら腹が立つであろう」、「〇〇が他の異性と話したいと思っているのをしたら腹が立つだろう」などの8項目から構成されている。今回はこの尺度と恋愛関係における追求—後悔尺度の関連について分析することにする。

**調査参加者：**【研究1】に使用したデータのうち、第2調査のデータ600名(男女300人ずつ)を分析対象とした。平均年齢は28.92歳(s.d. 5.82)、男性の平均年齢は29.75歳(s.d. 5.92)、女性の平均年齢は28.10歳(s.d. 5.60)である。

**結果：**嫉妬認知尺度の平均は26.67(s.d. 10.69)、嫉妬感情尺度の平均は34.56(s.d. 11.15)となった。これらの尺度はそれぞれ性差があり、嫉妬認知は男性のほうが女性より高く(男性27.85女性25.48;  $t(598) = 2.73, p < .01$ )、嫉妬感情は女性のほうが男性よりも高かった(男性32.68女性36.46;  $t(598) = -4.29, p < .01$ )。男性はより疑り深く、女性はより腹が立ちやすいという嫉妬の形態の違いがあるということである。

恋愛における追求—後悔尺度と多面的嫉妬尺度の関連に関しては、Table 3のような結果が得られた。つまり追求—後悔尺度の得点が高いほど、嫉妬認知も嫉妬感情も高くなるという傾向であ

る。とくに嫉妬認知においては比較的大きな相関が得られた。

**考察：**消費行動において、マキシマイザーは現状に対してつねにそれが本当に適切なものであるのかについて、絶えず吟味するということがわかっている。恋愛行動に関して同様なことがいえるのであれば、恋愛マキシマイザーは現在の恋人がつねに最高のものであるのかを批判的に吟味することになる。これは、まさに今の恋人が本当に自分のことを、自分のことだけを愛しているのかについてチェックし続けることを意味するが、これが嫉妬認知と関係していると思われる。

ただし、厳密に言えば、ここで明らかになったのはあくまで、相関関係であり、恋愛行動における追求—後悔傾向が嫉妬認知の原因になっているのか、あるいはその逆であるのかについては明確ではないことに留意しなくてはならない。

## 5. 【研究4】恋愛関係における追求—後悔尺度と交際期間、交際人数との関連

**問題と方法：**恋愛関係における追求—後悔尺度が実際の恋愛行動に影響を及ぼすとするとそこから、次のような仮説を導くことができる。

**仮説1：**恋愛マキシマイザーは、現状の選択を後悔し、よりよい選択を追求するため結果として現在の恋愛を早く終了させる可能性がある。その結果、恋愛マキシマイザーは恋愛サティスファイサーに比べてひとりの交際相手、あるいは現在の交際相手との交際期間が短いはずである。

**仮説2：**恋愛マキシマイザーは恋愛対象を次々に変えるため、恋愛サティスファイサーに比べていままで交際した人数が多くなるはずである。

【研究4】では、これらの問題について検討する。【研究1】の対象となったすべての参加者には現交際相手との交際期間について報告させているため、この期間と恋愛関係における追求—後悔尺度との相関を算出した。また、第3調査の参加者1,000名(男女500名ずつ)にはそれに加え、現在の交際相手と付き合う前の交際人数について

Table 3 恋愛における追求—後悔尺度の得点と多面的嫉妬尺度の相関

嫉妬認知	.329**
嫉妬感情	.106**

(\*\* $p < .01$ )

Table 4 交際期間を従属変数とした場合の重回帰分析結果

変数	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	S.E.	$\beta$		
定数	-26.7	5.03		-5.31	**
追求—後悔得点	-.132	.064	-.042	-2.07	*
年齢	1.92	.126	.313	15.3	**
性別	7.15	1.57	.094	4.56	**

(\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ )

報告させているそのため、この人数と恋愛関係における追求—後悔尺度との相関を算出した。

**調査参加者：**仮説1に関しては、【研究1】と同じデータセットを用いて分析を行った。仮説2に関しては第3次調査のデータ1,000名(男女500人ずつ)を分析対象とした。平均年齢は27.82歳(s.d. 6.66)、男性の平均年齢は29.22歳(s.d. 6.41)、女性の平均年齢は26.42歳(s.d. 6.60)である。

**結果：**仮説1を検証するために、恋愛関係における追求—後悔尺度の得点が平均より高い者と低い者に参加者を2分割し、それぞれの平均交際月齢を算出した。その結果、得点が高い群は、33.87ヶ月(s.d. 38.9)、低い群は34.35ヶ月(s.d. 37.3)となった。また、恋愛関係における追求—後悔尺度の得点と交際月齢の相関係数を算出したところ、(ただし、現在37歳、交際期間37年間とした1ケースのデータを削除して分析した)、 $r = -.055$ で無相関検定で1%水準で有意な負の相関があった。

ただし、交際期間については、参加者の年齢と密接な関係があると思われる。年齢が低い場合には交際期間も短くなりがちだからである。実際、年齢と交際期間の間には $r = 0.296$  ( $p < .01$ )の有意な相関があった。そこで、交際期間を従属変数とし、追求—後悔尺度得点と年齢、それにダミー変数として性別を独立変数とした重回帰分析を行った。その結果、重回帰係数は $R = .314$ となり、モデルも $F(3,996) = 80.118$ で $p < .01$ で有意となった。重回帰分析の結果をTable 4に示す。追求—後悔尺度の得点が高いほど交際月齢が短く

なる傾向が見られた(標準化 $\beta = -.042$ ,  $p < .05$ )。

次に仮説2を検証するために恋愛関係における追求—後悔尺度の得点が平均より高い者と低い者に参加者を2分割し、それぞれの平均交際人数を算出した。その結果、得点が高い群は、4.00人(s.d. 4.48)、低い群は3.04人(s.d. 3.86)となった。また、これらの間の相関を算出したところ、 $r = .150$ となった。この値は $p < .01$ で有意であった。この関係についても交際期間と同様に参加者の現在の年齢や性別などと密接に関連している可能性がある。そこで、やはり同様に過去の交際人数を従属変数とし、追求—後悔尺度得点と年齢、それにダミー変数として性別を独立変数とした重回帰分析を行った。その結果、重回帰係数は $R = .245$ となり、モデルも $F(3,996) = 20.752$ で $p < .01$ で有意となった。重回帰分析の結果をTable 5に示す。追求—後悔尺度の得点が高いほど交際人数が多くなる傾向が見られた(標準化 $\beta = .128$ ,  $p < .01$ )。

**考察：**理論的な仮説どおり、恋愛関係における追求—後悔尺度の得点は、現在の交際相手との交際期間および、過去の交際人数とは関係しており、恋愛マキシマイザーは恋愛サティスファイサーに比べて交際期間が短くなり、より多くの人と交際することがわかった。これはこの尺度が理論的な観点から見てもそれなりの妥当性を持っていることを示している。

Table 5 交際人数を従属変数とした場合の重回帰分析結果

変数	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	S.E.	$\beta$		
定数	-1.06	.831		-1.28	<i>n.s.</i>
追求—後悔得点	.043	.010	.128	4.12	**
年齢	.120	.020	.189	6.00	**
性別	-.092	.267	-.011	-.343	<i>n.s.</i>

(\*\*  $p < .01$ )

## 6. 【研究5】恋愛関係における追求—後悔尺度と消費意思決定との関連

**問題と方法：**Schwartz らのものの尺度は消費行動に焦点をあわせたものであり、消費におけるマキシマイザーとサティスファイサーについて評価し分析するものであった。本研究はこの概念をもとに恋愛における追求—後悔尺度を作成したものであるが、では、消費における追求—後悔傾向と恋愛における追求—後悔傾向は関連しているのだろうか。つまり、消費マキシマイザーは恋愛マキシマイザーでもあるのか、また消費サティスファイサーは恋愛サティスファイサーでもあるのだろうか。そこで、【研究5】では消費行動と恋愛行動における、追求—後悔尺度の関連性について分析してみることにする。なお、Shwartzの作成した消費における追求—後悔尺度は、その後、日本語版尺度としてより洗練されたものが作成されている（磯部・久富・松井・宇井・高橋・大庭・竹村, 2008）。Shwartzの尺度は一次元の尺度であったが、この尺度では、「追求」、「後悔」の二つの尺度が別々に構成されている。そこで今回はこの尺度を用いて、【研究1】で作成した恋愛における追求—後悔尺度との関連を明らかにしようと思う。

**調査参加者：**【研究3】と同じデータセットを用いて分析を行った。

**結果：**まず、綾部ら（2008）によって作成された（消費における）日本版後悔追求尺度の妥当性について確認するために本研究で得られたデータを

元に因子分析を行った、最尤法を用いてプロマックス回転を行ったところ、因子数を2に固定した場合、綾部ら（2008）論文と同様な因子が抽出された。因子間相関は.550、2つの因子で分散の49.025%を説明した。 $\alpha$ 係数は後悔因子で $\alpha = .901$ 、追求因子で $\alpha = .844$ 、後悔因子と追求因子を足し合わせた全尺度について $\alpha = .906$ であった。これらのことから綾部らの尺度をそのままの形で本研究で使用した。

恋愛における追求—後悔尺度と綾部ら（2008）の尺度のピアソンの相関係数を Table 6 に示した。全ての項目で、有意な正の相関が得られた。**考察：**消費における意思決定方略と恋愛におけるそれとは関係があり、消費におけるマキシマイザーは恋愛においてもマキシマイザーとして行動することが示された。ただし、Schwartz（2016）も指摘するように、人にはマキシマイザーとして行動する領域とそうでない領域がある。確かに今回得られた相関係数も特別に有意な値であるとはいえず、むしろ、それほど高くないということもできるかもしれない。また、追求因子にくらべ後悔因子の得点との相関が高かったという現象についても、「後悔」が「追求」に比べてより領域の枠を超えた一貫性をもっている可能性を示してい

Table 6 恋愛における追求—後悔尺度の得点と消費における追求—後悔尺度の相関

消費後悔	.401**
消費追求	.240**
消費後悔 + 追求	.368**

(\*\*  $p < .01$ )

るのかもしれない。これらの点については今後も引き続き検討していくことが必要であろう。

## 7. 【研究6】恋愛関係における追求—後悔尺度の再検査信頼性

**問題と方法：**【研究6】では、恋愛関係における追求—後悔尺度の再検査信頼性についてチェックする。この尺度得点が時間経過に対してどの程度安定しているのかを調査する。第3次調査の参加者1,000人について、約1年後に2回目の調査を実施した。この調査では、317名のデータを回収することができた。どちらの調査でも恋愛関係における追求—後悔尺度を実施しているので、これらの相関を分析することにした。

**調査参加者：**第3次調査の参加者1,000名のうち、第2回の調査にも参加した317名のデータを分析の対象とした。

**結果：**2回の調査における尺度のピアソンの相関係数は $r=0.470$  ( $p<.01$ )となった。この値は、同じ尺度を用いたにしてはそれほど高いものではないが1年間のインターバルを考えるとそれなりに安定した値であると思われる。この調査の対象となった317名のうち、242名については、1年前と同様の相手と交際を行っていたが、75名については別れていた。そこで、これらのそれぞれのグループについて、2回の尺度の相関をとってみた。その結果、交際継続群では $r=0.515$ となったのに対し、交際終了群では $r=0.320$ となった。これは、交際が継続している場合には、恋愛関係における追求—後悔尺度得点は比較的安定しているものの、交際が終了してしまった場合には、尺

度得点が変わる、すなわち恋愛に対する意思決定のスタイルが変化する可能性があることを意味している。ただし、測定時1と測定時2のそれぞれの群の平均値を比較してみたところ、交際継続群では、測定時1と測定時2の間には有意な差 ( $t(482)=2.22, p<.05$ ) が見られ、測定時1に比べて測定時2の得点が低下していたが、交際終了群では差は見られなかった ( $t(148)=0.769, n.s.$ )。これは、交際終了群では、交際終了後、追求—後悔尺度の得点が高くなる者と低くなる者が含まれており、特定の方向性を持った変化が起こるわけではないことを意味している。

**考察：**この結果は、恋愛関係における追求—後悔尺度の信頼性を示すものであるが、交際の終了によって、この尺度の値が変化する可能性があること、その方向性は一定していないことを示したという点では興味深い。恋愛の終了は、さまざまな態度、行動の変化を引き起こす可能性があるもので、追求—後悔に関する態度も変わっていくのかもしれない。今後はこの変化と恋愛関係の終結形態などの関連について引き続き検討していくことが必要であろう。

また、消費における追求—後悔尺度の時間的な安定性のデータがあれば、恋愛行動における追求—後悔尺度の時間的な変化との関連性が明らかになるとと思われるが、現在のところ消費における追求—後悔尺度について時間をおいて複数の測定を行った研究は見当たらず、検討はできなかった。この点についても検討の必要は残っているであろう。

## 8. 総合考察

本研究では、消費行動における追求—後悔尺度をもとにそれを恋愛関係における恋人選択行動に特化させた尺度を作成することを試みた。【研究1】では、2,200名のデータを元に一次元の尺度を構成し、引き続き諸研究において、その妥当性と信頼性について検討した。結果として、追求—後悔尺度の得点の高いもの、恋愛におけるマキシマイザーは恋愛に関する幸福感が低く、嫉妬認知

Table 7 恋愛における追求—後悔尺度の得点と消費における追求—後悔尺度の相関

	相関係数
全対象者 (317人)	.470**
交際継続群 (242人)	.515**
交際終了群 (75人)	.320**

(\*\*  $p<.01, *p<.05$ )

Table 8 交際の継続・終了、測定時ごとに集計した恋愛における追求—後悔尺度の得点

	測定時 1	測定時 2
全対象者	34.96 (11.80)	32.80 (12.00)
交際継続群	35.00 (11.70)	32.56 (12.24)
交際終了群	34.83 (12.18)	33.56 (11.22)

( ) 内は標準偏差 (s.d.)

をしやすく、多くの人と交際し、それぞれの交際期間は短いということが示された。これらの点はいずれも理論的な予想と整合しておりこの尺度が高い妥当性を持っていることが示された。また、恋愛における追求—後悔尺度の得点は、消費行動における追求—後悔尺度の得点と比較的高い相関をもっており、恋人選択過程と購買行動が類似したパターンを示すことも示された。これもこの尺度の併存的妥当性を示すものと考えられるだろう。さらに、この尺度は、一年の間を空けた再テストにおいても比較的安定した値をとることから、信頼性もあるといえるであろう。

恋愛行動は、そもそも、選択からはじまる複雑な人間関係である。そのため、選択行動の個人差である追求—後悔尺度の得点が、恋愛の様々な局面に影響を与えているということは十分考えられる。すでにこの傾向がドメスティックバイオレンス、ハラスメントと何らかの関係を持っているのではないかということが指摘されている(越智ら 2016b)、そのため、今回構成された尺度は、恋愛関係におけるさまざまな現象を選択行動という観点から理解するに当たっての有力なツールになると思われる。今後、さらなる研究を行うことによって恋愛行動のさまざまな側面が明らかになるであろう。

#### 引用文献

- 磯部綾美, 久富哲兵, 松井豊, 宇井美代子, 高橋尚也, 大庭剛司, 竹村和久 (2008). 意思決定における“日本版後悔・追求者尺度”作成の試み. *心理学研究*, 79 (5), 453-458.
- Martz, J. M., Verette, I., Arriaga, X. B., Slovik, I., Cox, C., & Rusbult, C. E. 1998 Positive illusion in close relationships. *Personal Relationships*, 5, 159-181.
- 越智啓太 (2015). 恋愛の科学 実務教育出版
- 越智啓太, 長沼里美, 甲斐恵利奈 (2014). 大学生に対するデートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成. *法政大学文学部紀要*, 69, 63-74.
- 越智啓太, 喜入暁, 甲斐恵利奈, 長沼里美 (2015a). 女性蔑視の態度がデートハラスメントに及ぼす効果. *法政大学文学部紀要*, 70, 101-110.
- 越智啓太, 喜入暁, 甲斐恵利奈, 佐山七生, 長沼里美 (2015b). 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析(1)—被害に焦点を当てた分析— *法政大学文学部紀要*, 71, 135-147.
- 越智啓太, 喜入暁, 甲斐恵利奈, 佐山七生, 長沼里美 (2016a). 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析(2)—加害に焦点を当てた分析— *法政大学文学部紀要*, 72, 161-171.
- 越智啓太, 甲斐恵利奈, 喜入暁, 長沼里美 (2016b). 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析(3)—恋愛行動パターンとDVの関連— *法政大学文学部紀要*, 73, 109-126.
- 越智啓太, 喜入暁, 甲斐恵利奈 (2017). 多面的嫉妬尺度の作成とデートバイオレンス・ハラスメントの関連—改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析(4)— *法政大学文学部紀要*, 74, 119-127.
- Pfeiffer, S. M., & Wong, P. T. (1989). Multidimensional jealousy. *Journal of Social and Personal Relationships*, 6 (2), 181-196.
- Schwartz, B., Ward, A., Monterosso, J., Lyubomirsky, S., White, K., & Lehman, D. R. (2002). Maximizing versus satisficing: happiness is a matter of choice. *Journal of personality and social psychology*, 83 (5), 1178-1197.
- Schwartz, B. (2016). *The paradox of choice: Why more is less*. Revised edition New York: Ecco.

#### 注 釈

- 注1) 本研究は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C)の助成を受けて行われた。
- 注2) 本研究の一部は第59回日本社会心理学会(追手門学院大学)において発表された。

## Construction of Maximization and Regret Scale in Romantic Relationships

Keita OCHI

### **Abstract**

This study applied maximization and regret scale of consuming behavior for romantic relationships, and examined its reliability / validity. The results showed that high maximizer and regretter tend to feel low happiness on love, be jealous, date with many partners and for only short period. Moreover, it was also shown that the score of maximization and regret scale for romantic relationships correlates positively of that for consuming behavior.